

一六世紀の銀をめぐる世界交易

上郷高校 古川寛紀

一 はじめに

一六世紀から一九世紀まで、世界経済はアジアによって支配され続け、ヨーロッパは世界経済の周縁であった。この期間、ヨーロッパが世界市場へ参入できたのは、アメリカの銀を継続的に獲得することが可能であったからである。一六世紀以降グローバルな市場の車輪回転の潤滑油となっていたのは、世界的規模での銀の流通であった。ヨーロッパ人がこの拡大する世界市場にやっと参加できたのもひとえにアメリカ大陸で発見された銀という入手先があったからである。

二 銀時代の幕明け

フランスの歴史家F・ブローデルは世界的に交易が拡大した時代を「長期の一六世紀」（一四五〇～一六四〇年代）と呼んでいる。この期間の交易の拡大傾向は、ヨーロッパからの香料・胡椒の需要拡大を契機にアジアを中心に一四〇〇年頃から交易の拡大が進行した。

交易のブームは、日本・中国・インド・そしてヨーロッパで同時に起こっていた経済拡張と需要の増大時期に重なっていた。このような大交易の時代に、銀は東向きに流れ、各種の物品は西向きに流れていた。一六世紀、世界的にみて銀の流通量が飛躍的に増大した。その背景には、よく知られているように新大陸アメリカにおける銀鉱山の開発がある。しかし、東アジアについてみると、一六世紀前

半の銀の時代の本格的幕あけを果たしたのは、日本の銀であった。

一五世紀初め、中国では紙幣制度の混乱の後、税の一部が銀納化した後、銅銭の使用も再び活性化した。一五三〇年代、日本銀の産出が急増し、日本から中国・朝鮮への銀の流れが圧倒的になった。その契機は灰吹法という銀の精錬法が朝鮮から日本に伝わったことである。灰吹法とは、不純物を含む銀鉱石を鉛と一緒に加熱して不純物の除去された銀と鉛との混合物を得る。そのうち灰の上でその混合物を加熱すると鉛がさきに溶けて灰に吸収され、銀が残るという方法である。日本の銀は中国東南部へ、また朝鮮を経て遼東半島から中国本土へ運ばれた。

(1) 西アジア

西アジアを全体的に概括するとヨーロッパに対しては黒字、南アジア・東南アジア・東アジアに対しては赤字であった。この方面では圧倒的に銀が東向きに流れていた。西アジアでは東方との貿易赤字を、特にアナトリアとペルシアで産する金および銀だけでなく、ヨーロッパおよびマグレブとそれに介した西アフリカとの交易における地金、更に東アフリカからの金を再輸出することで埋め合わせた。

(2) インド

インドは、より効率的で低コストの綿織物生産、及び輸出用の胡椒に大体の基礎を置いており、ヨーロッパに対して莫大な、西アジアに対してもある程度の貿易黒字を計上し、大量な銀を獲得していた。インドの商品は、西回りにアフリカ・西アジア・ヨーロッパに流れ、さらにそこから大西洋を渡ってカリブ海、南北両アメリカへおくられた。

インドはまた米・豆類・植物油のような日用食料の輸出も行っていた。その輸出は、西向きではペルシア湾及び紅海の諸貿易港へ、東向きにはマラッカその他の東南アジアの地域へ向かい、その対価として莫大な銀を受け取った。その金銀は、西洋から喜望峰をまわって直接西アジア経由で流入していた。インドでは自領では銀をほとんど産しないため、輸入された銀は貨幣に鑄造されるか、再輸出されて金と交換され、金細工として退蔵された。インドは東南アジアに対して綿布を輸出し香料を輸入した。同ルートで、綿布と中国産の陶磁器も取引された。しかし東南アジアでの貿易は赤字であった。

(3) 東南アジア

東南アジアは世界交易の自然発生的な交差点ないし合流点であったので、世界の中で商業的に最も重要な地域であった。一五世紀の初めから、マレー半島の最も狭い地域であるクラ海峡がベンガル湾と南シナ海を結ぶ連結水陸路として用いられた。特に香料の中には、ほとんど特定の島でしか取れないものもあり、胡椒もインド産のものより三分の一も安くすんだのでインド産の胡椒を駆逐するようになった。都市化にともない農村部でも換金作物の栽培が促進され、日用食糧の大規模な輸入があった。

東南アジアは、域内で産する香料とスズをヨーロッパ・西アジアおよびインドに輸出し、インドからの輸入品を中国に再輸出していた。中国は東南アジアにとって主要な顧客であり、ヨーロッパの約8倍の取引があった。東南アジアは、インドから銀を受け取り、マラッカ経由で中国に輸出した。したがって東南アジアは、インド・西アジア・ヨーロッパに対して貿易黒字で中国に対して赤字であった。一四〇〇〜一六三〇年代という期間は、その全体が急速な貨幣

経済と商品経済の進展の時期であった。最も激しく進展したのは、一五七〇〜一六三〇年の時期であった。同時代のいかなる水準から見ても高い割合の人口が、世界経済向けの生産と流通に引き込まれ、衣服や陶磁器、食器や貨幣といった日用の消費財を遠距離交易の輸入に頼るようになった。交易が東南アジアの国民所得において比較的高い水準をもたらせた。また都市化も進み、全面的に交易と商売だけを行う共同体も出現した。

(4) 日本

日本は潜在的な中国の競合相手であり、特に中国が「内憂外患」に苦しんでいるときは、比較的優位を押し通そうとした。明代初期に中国が世界経済から撤退し、経済的に下降していたのと同じ時期に極東交易に活発に参与し、大きな経済的真空が生み出されたのを日本がすばやく埋めたのである。中国が引いたことが、日本にとってはずみになった。一五六〇年代以降、日本はまず銀の主要な生産者および輸出者となり、中国及び東南アジアにそれを送った。ある程度の金とかなりの量の硫黄、ならびに樟脳・鉄・刀剣・漆・家具・酒・茶・及び高品質の米も輸出しており、それらは遠くインド、西アジアにまで達した。見返りに日本は、中国の絹、インドの綿布、その他の鉛・スズ・木材・染料・砂糖・皮革・水銀などの消費財を中国及び東南アジアから受け取った。アジア、特に中国に対する日本とヨーロッパの関係は相同的である。両者はともに中国から製品を輸入し、その支払いに銀を輸出した。

日本にとって、一五七〇〜一六三〇年の期間は繁栄の時代であった。この期間の日本では国家が統一され、活発な国内交易の核として都市が繁栄し、東南アジアとの旺盛な交易を支えるために大量の

銀が採掘された。日本船が直接中国で交易することは禁止されていたが、そのため日本銀と中国の絹との交換は、東南アジアの諸港、特にマニラとホイアンで行われた。一六〇四〜一六三五年の期間を通じて毎年約一〇隻の日本船が南下して交易することが許可された。そのうちヴェトナムに向かった数が三一年間で一二四隻、フィリピン五八隻、シヤム五六隻が続いている。一六〇四〜一六三五年の間に三五五隻の日本船が公式に東南アジアへ向かったとの記録も残されている。この時期、東南アジアを拠点に日本による中国からの絹の輸入は四〇万キロに達した。

(5) 中国

中国の銀の産出は、一五世紀前半の永樂帝や宣徳帝の時代には、浙江・福建地方を中心に多い時に年間一〇〇万両(約三七トン)程度の産出量があった。その後、銀の産出量は減少し枯渇した。

明は対モンゴル戦争の必要から銀に依存する性格を強めていった。一五世紀後半から万里の長城を整備して九つの軍管区を置き、大量の軍隊を北辺に配備した。明政府は、当初は穀物など現物で税を徴収していたが穀物を前線に運ぶ困難さから次第に価値の高い銀(運びやすい)を税として取り立て、はじめは少量の国内産の銀を毎年入手して税として支払った。内地に残る銀はだんだん減少し、希少化にもかかわらず税や揺役の銀納化が進んだので、国家に支払う銀を手に入れることが困難になった。このような銀の需要に対して日本からの銀の流れが奔流化した。

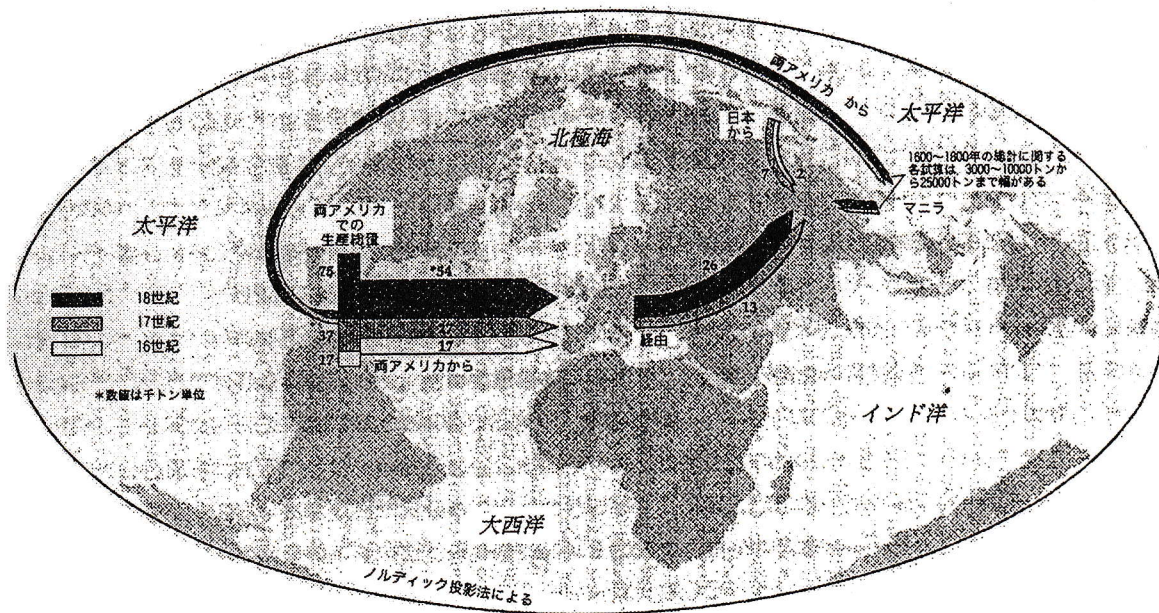
明初期からの「海禁」は民間貿易の禁止によって日本からの銀の流入は堰き止められていた。そのダムを突き崩したのが一六世紀の「倭寇」である。

倭寇とは日本の海賊の意味であるが、一六世紀の倭寇は、一四世紀のそれと区別して「後期倭寇」と呼ばれている。この倭寇は日本人は「一〇のうち一、二」で、日本・中国など東シナ海周辺で活動する様々な人々が入りまじった密貿易集団であり、彼らもたらす銀がこの地域における経済の活況の源でもあった。モンゴルと倭寇の危機が時期に高まったのは偶然ではない。北方の軍事的緊張が高まる程、軍事費は増大して中国の銀需要が強くなり、日本銀の流入の度合が広まった。このように「北虜」と「南倭」は銀を媒介に結びついていた。

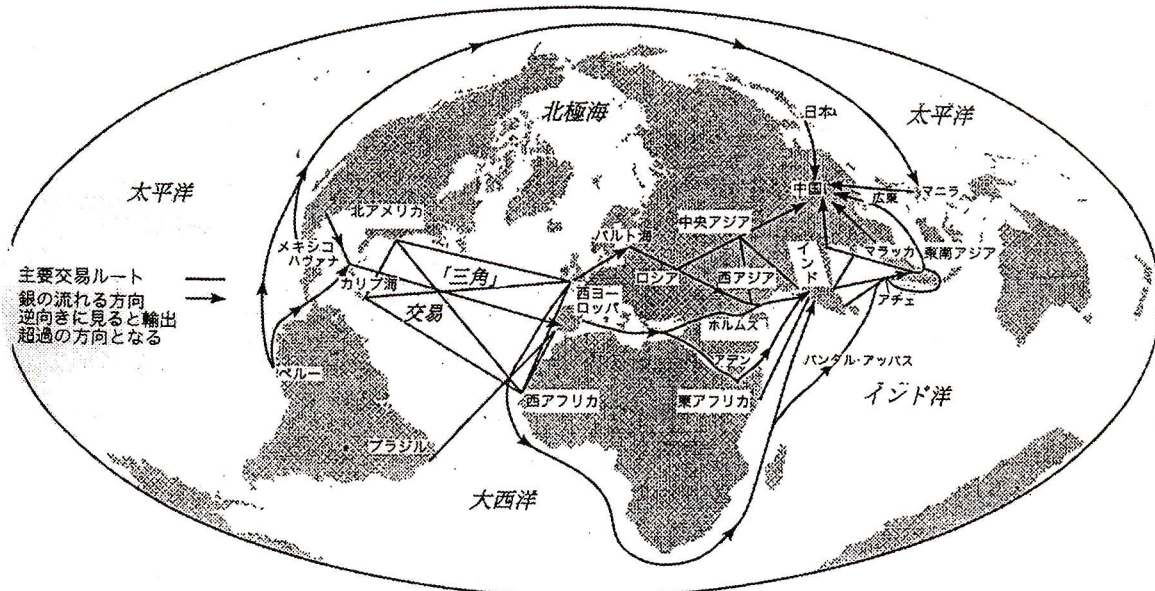
明朝は一五六七年に「海禁」を緩め、日本への渡航を除く民間の海上貿易を許可した。また一五七〇年にはモンゴルとの間に和議を結んで北方の交易を軌道に乗せようとした。一六〇〇年前後、中国船がマニラから積み出した銀は年平均一〇〇万ペソ(約二五トン)程度と見積られる。一七世紀初頭には、丁銀勘定で年間四〇〇万両から五〇〇万両(一五〇トン〜一九〇トン)と見積られるが、その大半が中国に流入した。ひかえめな見積りでも、中国の日本銀輸入量は一六一〇年代に五〇トン、三〇年代には八五トン程度にのぼった。この時期の中国は「銀の終着点」と呼べよう。当時の銀のほとんどを産出していたアメリカ大陸と日本からの銀の輸出量のうち五分の一から三分の一程度の量が中国に流入した。この時期に北京の国庫から北方軍事地帯に毎年運ばれた銀の額がちょうど四〇〇万両程度であった。中国の銀は北方に吸い上げられ、その隙間をアメリカ大陸や日本の銀が埋めたのである。

また長江下流域の上海近郊では綿工業と綿産業が成長してきた。米とその他の換金作物が加わり、この地域を中国の最も豊かな地域

世界の銀生産、輸出、受取



1400~1800年の主要な環地球交易ルート



参考文献

A.G フランク (山下範久訳) 『リオリエント』 藤原書店 2000年

とした。経済の商業化は、農村の「風景」を改変する強力な力となった。珠江デルタ農民は、水田を掘り起こして養魚池を作り、その堤防に桑を植えたばかりか、結果として生じた彼ら食糧需要によって、嶺南の残りの地域の可耕地の多くを米の輸出単作地域にかえてしまった。サトウキビ、一時的には綿花などを含む商品作物農業の面で見ると、広東地方の可耕地の半分を占めるところまでになり、一八世紀初頭には米の自給率は五割程度に下がって供給不足となった。

生産および輸出における世界経済に占める卓越した地位を誇る中国陶磁器については競合するものはなかった（日本はまだ登場していない）。最大の輸出品であった絹についても競争相手がなかった。その輸出先は他のアジア諸国、次いでマニラアメリカ間交易に乗るものであった。もう一つ重要な要因は、中国が世界の銀の生産の最終的な「はけ口」（シンク）としての位置を占めた。国庫収入のうち銀納される割合はどんどん高まっていき、「一条鞭法」が施行されて最終的に全て税は銀納化された。このような中国の公的な銀需要と中国経済の規模の大きさと高い生産性、その結果としての輸出超過が世界中の銀に対する莫大な銀の需要を生み出した。

三 まとめ

銀は世界交易の出現の背後にある決定的な起動力であり、明代中国国内の新しい通貨・金融レジームの登場は、中華的な世界経済の文脈において近世期のグローバルな交易の起動力となった。中国の銀への渴望も銀に見合うだけの有効な経済力があり、世界市場における手工業生産においても、その高い生産性と低い生産費用による競争力のおかげで諸財を供給する生産を効率的に行っていた。中華的多国間交易においても、アメリカの貨幣があればこそヨーロッパ

人の「グローバル経済」への参加を高めることができた。赤字地域のヨーロッパは、輸出品をアフリカからアメリカ、アメリカからアジアへ、アジアからアフリカとアメリカという具合に「管理」することで赤字を埋め合わせていた。

《参考文献》

- A・G フランク（山下範久訳）『リオリエント』 藤原書店 二〇〇〇年
川勝平太・濱下武志編 『海と資本主義』 東洋経済新報社 二〇〇三年
岸本美緒 『東アジアの「近世」』 山下出版 一九九八年
黒田明伸 『貨幣システムの世界史』 岩波書店 二〇〇三年